

令和4年度 事業報告書

令和4年4月 1日から

令和5年3月31日まで

公益財団法人アルカンシエール美術財団

令和4年度事業報告

I. 事業事項

令和4年度 原美術館 ARC 事業概況

令和4年度は、前年1月の原美術館閉館に始まった原美術館とハラ ミュージアム アークの活動統合と「原美術館ARC」への改称から一年を経て、ようやく落ち着き始めた年であった。長引くコロナ禍も下半期にはうっすらと収束の兆しが見えてきたが、メディアでは連日、感染者数がトップニュースで報道されており、館内にあってもマスク着用や館内の導線・人数制限の徹底、開館中も定期的に繰り返される清掃・消毒といった万全の感染対策を続けざるを得ず、予断を許さない状況でもあった。

本年度の開館日数は252日、総入館者数は23,959名、平均入館者数は95名で、昨年度より減少した。(昨年度はそれぞれ、240日、25,667名、107名)

展覧会ベースで精査すると、前年度の「虹をかける」展は会期が229日間で総入館者数は24,260名、1日平均は106名で、本年度の「雲をつかむ」展は256日間で24,587名、1日平均は96名となった。

インバウンド需要の落ち込みと、耳目を集めた統合ニュースがひと段落したことへの反響は否めないが、引き続き、地に足を付け着実な活動を続けることで新たなファンも獲得してゆきたい。

なお、本年度末の3月からは、オンラインでのチケット前売りシステムを導入し、来館者の利便性の向上はもとより、チケットブース周りの渋滞緩和にも寄与している。同時に、入館料の改定も世相や当館の現状に即した形で行った。また、年度末からの国宝公開に先立ち、防犯・警備システムの強化や植栽による来館者の導線の統一も実施した。

学芸部門では、展覧会事業のほか、昨年度、原美術館にあった屋内のパーマネント作品の移設を、ジャン＝ピエール レイノー『ゼロの空間』を残しほぼ完了したことに続き、本年度は野外彫刻の移設に多くの時間を費やした。関根伸夫、多田美波、飯田善國、イサムノグチといった美術史に名を残す作家たちが手がけ、開館当初より原美術館の庭を彩り、共に歴史を刻んできた作品群は、いま、伊香保の地で新たな場所を与えられ、生き生きと来館者を迎えている。なお、昨年度に原俊夫理事長より寄贈された111点にのぼる古美術作品(原六郎コレクション)の燻蒸作業も完了し、目下、外部識者の協力も得て、調査・研究・修復作業を進めており、その成果として特別展示室 観海庵において展示公開も始めている。

本年度のマスコミの取材件数は178件、うち和文媒体174件、外国語媒体4件であった。

原美術館 ARC において株式会社アーテックが当財団より委託され営業している The Museum Shop の年間利用客数は4,603名、対総入館者比は19.2%であった。おなじく委託事業であるカフェ ダールの年間利用客数は7,857名、対総入館者比は32.8%であった。

A. 学芸事項

A. 学芸事項

今期において次の通り展覧会を開催した。

【1】原美術館 ARC

入館者数：23,959 人

2022年4月1日－2023年1月9日、2023年3月24日－3月31日（開館日数 252 日）

（令和3年度入館者数 25,667 人／2021年4月24日－2022年1月10日、2022年3月19日－3月31日（開館日数 240 日））

「雲をつかむ：原美術館／原六郎コレクション」

会期 第1期（春夏季） 2022年3月19日（土）－9月4日（日）

第2期（秋冬季） 2022年9月10日（土）－2023年1月9日（月・祝）

*古美術展示替え（2022年6月30日、11月9日）

開催日数 第1期：151日 第2期：105日 計：256日

入館者数 第1期：15,538人（1日平均103人）、第2期：9,049人（1日平均86人）、全会期入館者数24,587人（1日平均96人）

昨年度の「虹をかける」に続き、作品制作や鑑賞のあり方の一端を表す言葉を当館の豊かな自然環境に求め、「雲をつかむ」と題し、「原美術館コレクション」（現代美術）と「原六郎コレクション」（東洋古美術）を春夏季と秋冬季の2期に分けて展覧した。

「雲をつかむ」という言葉は、「雲をつかむような話」といったように、漠然としてとらえどころのない様や現実味のないことを意味し、少々ネガティブな印象を与えるが、一般的な意味・解釈から解放すれば、非現実的と思われることにあえて挑戦する姿勢や、混沌とした状況や不透明な事象から、真実らしきものや本質とみなし得るものをとらえようとする意志を表すポジティブな言葉とみなすこともできる。

そのような言葉をもとに現代美術ギャラリーA、B、Cには、作家が自己や美術や社会の本質をつかもうと独自の理論・手法を編み出して制作した作品や、現実の再現ではなく概念を作品化したもの、具体的な像を結ばない抽象絵画や立体、不可解な光景が連なる多義的な写真作品などを展示。

一方、特別展示室 観海庵では、雲を描くことで場面を転換したり時の流れを表したりする日本近世絵画や、仏教絵画における雲の表現をご覧いただいた。また、円山応挙の『淀川兩岸図巻』（下図）を巻き替えながら通年で展示。本図を描くための応挙の淀川体験と意図を下図から読み解いていった。

原美術館 ARC の広い空には、西の山の向こうから雲が現れてはかたちを変えながら流れている。

雲水を眺めながら作品の意図をつかもうと次から次へと考えを巡らせる展覧会とした。

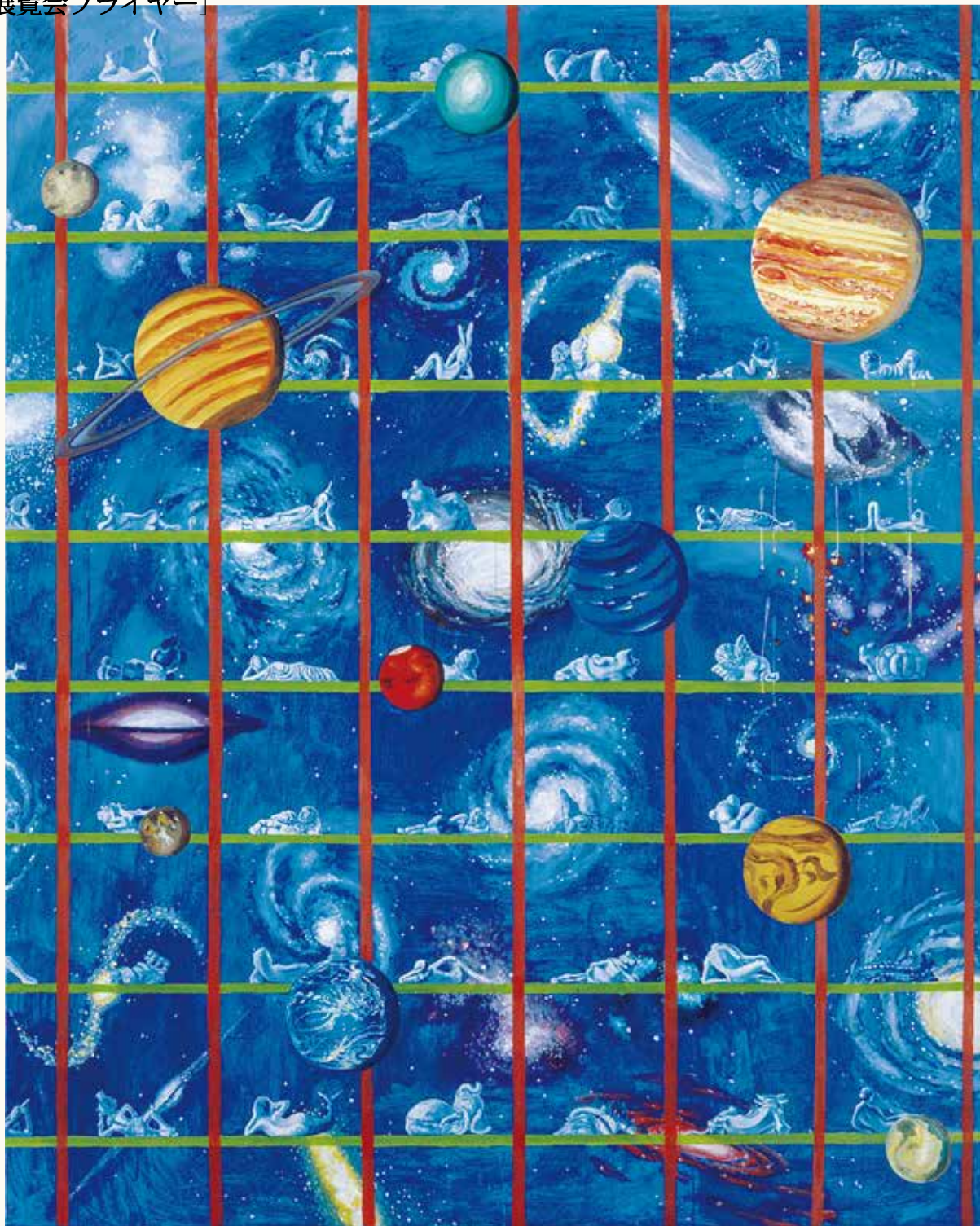
出品作家

第1期（春夏季）現代美術：エレナ アルメイダ、井田照一、内倉ひとみ、笹口数、杉本博司、須田悦弘、ピエール スーラージュ、辰野登恵子、アントニ タピエス、野村仁、ナム ジュン パイク、藤本由紀夫、宮脇愛子、森村泰昌、山口長男、吉田克朗、エドワード ルシェ、ジャン＝ピエール レイノー、リチャード ロングなど

古美術：狩野派『蘭亭図』、円山応挙『淀川両岸図巻』（下図）、『仏涅槃図』など

第2期（秋冬季）現代美術：榎倉康二、大野智史、加藤泉、イヴ クライン、白髪一雄、中村一美、鳴海暢平、堀浩哉、ジョナサン ボロフスキー、増田佳江、ジャック モノリー、トレイシー モファット、森浩治、横尾忠則、吉田克朗、李禹煥など

古美術：円山応挙『淀川両岸図巻』（下図）、『帰去来・放白鵬図』など



雲をつかむ 原美術館／原六郎コレクション

第1期 [春夏季]: 2022年3月19日(土) - 9月4日(日)

第2期 [秋冬季]: 2022年9月10日(土) - 2023年1月9日(月・祝)

原美術館 ARC

Grasping at Clouds

Works from the Hara Museum and
the Hara Rokuro Collections

Part I: March 19 (Sat.) - September 4 (Sun.), 2022

Part II: September 10 (Sat.), 2022 - January 9 (Mon.), 2023

Hara Museum ARC

原美術館ARCでは、「雲をつかむ：原美術館／原六郎コレクション」展を開催いたします。昨年の「虹をかける」に続き、今年も作品制作や鑑賞のあり方の一端を表す言葉を当館の豊かな自然環境に求め、「雲をつかむ」と題し、「原美術館コレクション」(現代美術)と「原六郎コレクション」(東洋古美術)を春夏季と秋冬季の2期に分けて展覧します。

Hara Museum ARC is delighted to present the exhibition *Grasping at Clouds: Works from the Hara Museum and the Hara Rokuro Collections*. As with the previous year's exhibition, *A Nexus of Rainbows*, the title of this exhibition refers to a certain process that goes through the mind during the creation and enjoyment of art with a term inspired by the museum's rich natural environment. The works selected in turn from the Hara Museum Collection (contemporary art) and the Hara Rokuro Collection (traditional East Asian art) are being presented in two parts: Part I for spring and summer and Part II for autumn and winter.

雲をつかむ：原美術館／原六郎コレクション

第1期[春夏季] 2022年3月19日(土)–9月4日(日) 第2期[秋冬季] 2022年9月10日(土)–2023年1月9日(月・祝)

*特別展示室「観海庵」は、第1期、第2期ともに会期中各1回の展示替えがあります。

*新型コロナウイルス等の影響により、会期変更の可能性あります。最新情報は公式ウェブサイトでご確認ください。

Grasping at Clouds: Works from the Hara Museum and the Hara Rokuro Collections

Part I: March 19 (Saturday) – September 4 (Sunday), 2022 Part II: September 10 (Saturday), 2022 – January 9 (Monday/national holiday), 2023

* One change of exhibits will take place at the Kankai Pavilion during Part I and Part II of the exhibition.

* The exhibition period is subject to change, depending on the situation with the novel coronavirus. Please check the museum website for the latest information.

「雲をつかむ」という言葉は、「雲をつかむような話」といったように、漠然としてとらえどころのない様や、現実味のないことを意味し、少々ネガティブな印象を与えます。しかし、一般的な意味・解釈から解放すれば、非現実的と思われることにあえて挑戦する姿勢や、混沌とした状況や不透明な事象から、真実らしきものや本質とみなし得るものをとらえようとする意志を表すポジティブな言葉とみなすこともできます。

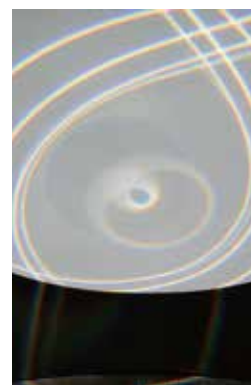
そのような「雲をつかむ」という言葉をもとに現代美術ギャラリーA、B、Cに展示される作品の多くは、作家が自己や美術や社会の本質をつかもうと独自の理論・手法を編み出して制作した作品や、現実の再現ではなく概念を作品化したもの、具体的な像を結ばない抽象絵画や立体、不可解な光景が連なる多義的な写真作品など。一方、特別展示室「観海庵」では、雲を描くことで場面を転換したり時の流れを表したりする日本近世絵画や、仏教絵画における雲の表現をご覧ください。また、円山応挙の「淀川兩岸図巻」(下図)を巻き替えながら通年で展示。本図を描くための応挙の淀川体験と意図を下図から読み解きます。

原美術館ARCの広い空には、西の山の向こうから雲が現れてはかたちを変えながら流れていきます。雲水を眺めながら作品の意図をつかもうと次から次へと考えを巡らせる——ここは、そのような場所です。

In Japanese, the expression "grasping at clouds" is used to describe something that is vague, elusive or unrealistic and is therefore somewhat negative in connotation. In this exhibition, it is used in a positive way to describe the tendency of art and artists to take on seemingly unrealistic challenges or attempt to wrestle truth from chaotic situations or uncertain conditions.

The works in Contemporary Art Gallery A, B, and C were selected based on this latter meaning. They include pieces in which the essence of the artist, art or society has been captured using unique theoretical or methodical approaches. Here we are presented with paintings and sculptures that depict conceptual or abstract ideas rather than concrete or realistic images, and photographs that display perplexing scenes with multiple possible meanings.

In the special exhibition space Kankai Pavilion, clouds in early modern Japanese paintings are used as compositional devices that signal a change in scene or represent the flow of time. Also on display throughout the exhibition is Maruyama Okyo's sketch for his monumental painting *Landscape of Yodo River* with hints that provide a deeper understanding of the finished painting.



上段左より

奈良美智「My Drawing Room」2004/2021年／森村泰昌「輪舞(双子)」1994/2021年／宮島達男「時の連鎖」1989/1994/2021年／オラファーエリアソン「Sunspace for Shibukawa」2009年／草間彌生「ミラールーム(かぼちゃ)」1991/1992年／鈴木康広「日本列島のベンチ」2014/2021年
撮影：木暮伸也

From top left

Yoshitomo Nara, *My Drawing Room*, 2004/2021 ©Yoshitomo Nara/Yasumasa Morimura, *Rondo (Twins)*, 1994/2021 ©Yasumasa Morimura/Tatsuo Miyajima, *Time Link*, 1989/1994/2021 ©Tatsuo Miyajima/Olafur Eliasson, *Sunspace for Shibukawa*, 2009 ©2009 Olafur Eliasson/Yayoi Kusama, *Mirror Room (Pumpkin)*, 1991/1992 ©Yayoi Kusama/Yasuhiro Suzuki, *Bench of the Japanese Archipelago*, 2014/2021 ©Yasuhiro Suzuki
Photos by Shinya Kigure

出品作家(予定)

第1期[春夏季]

現代美術: エレーナ アルメイダ/井田照一/内倉ひとみ/笹口数/杉本博司
須田悦弘/ピエール スーラージュ/辰野登恵子/野村仁/ナム ジュン バイク
藤本由紀夫/宮脇愛子/森村泰昌/山口長男/吉田克朗/エドワード ルシェ
ジャン=ピエール レイノー/リチャード ロング など
古美術: 狩野派「蘭亭図」(三井寺旧日光院客殿障壁画)/円山応挙「淀川兩岸図巻」
(下図)/「仏涅槃図」/「ぶりぶり蒔絵徳利提」など

第2期[秋冬季]

現代美術: 榎倉康二/大野智史/加藤泉/白髪一雄/中村一美
鳴海暢平/堀浩哉/ジョナサン ポロフスキー/増田佳江/ジャック モノリー
トレイシー モファット/森弘治/横尾忠則/吉田克朗/李禹煥 など
古美術: 狩野派「帰去来・放白鷗図」(三井寺旧日光院客殿障壁画)/「葡萄栗鼠蒔絵
提重」/円山応挙「淀川兩岸図巻」(下図) など

長期展示: オラファー エリアソン「Sunspace for Shibukawa」
アニッシュ カプーア「虚空」/草間彌生「ミラールーム(かぼちゃ)」
鈴木康広「日本列島のベンチ」/束芋「真夜中の海」/奈良美智「My Drawing Room」
宮島達男「時の連鎖」/森村泰昌「輪舞(双子)」など

Featured Artists (slated)

Part I Spring-Summer

Contemporary Art: Helena Almeida / Yukio Fujimoto / Shoichi Ida / Richard Long
Aiko Miyawaki / Yasumasa Morimura / Hitoshi Nomura / Nam June Paik / Jean-Pierre
Raynaud / Edward Ruscha / Kazz Sasaguchi / Pierre Soulages / Yoshihiro Suda
Hiroshi Sugimoto / Toeko Tatsuno / Hitomi Uchikura / Takeo Yamaguchi / Katsuro
Yoshida and others

Traditional Art: Kano school, Scene based on an old Chinese anecdote "Assembly at
the Orchid Pavilion"* / Maruyama Okyo, Sketch of Yodo River / Scene of mournful
assembly at the death of Buddha / Pair of Satsuma ware sake bottles with portable
maki-e case and others

Part II Autumn-Winter

Contemporary Art: Jonathan Borofsky / Koji Enokura / Kosai Hori / Izumi Kato / Kae
Masuda / Tracey Moffatt / Jacques Monory / Hiroharu Mori / Kazumi Nakamura
Nobuhira Narumi / Satoshi Ohno / Kazuo Shiraga / Lee Ufan / Tadanori Yokoo
Katsuro Yoshida and others

Traditional Art: Kano school, Scene based on an anecdote by Tao Yuanming (poet of
the Jin dynasty)* / Tier of boxes decorated with squirrels and vine scrolls design in
maki-e / Maruyama Okyo, Sketch of Yodo River and others

* Part of paintings used for wallpaper and sliding doors at Nikko-in guest hall in
Mi'idera temple.

Parts I and II: Olafur Eliasson, Sunspace for Shibukawa / Anish Kapoor, Void / Yayoi
Kusama, Mirror Room (Pumpkin) / Tatsuo Miyajima, Time Link / Yasumasa Morimura,
Rondo (Twins) / Yoshitomo Nara, My drawing Room / Yasuhiro Suzuki, Bench of the
Japanese Archipelago / Tabaimo, Midnight Sea and others

宮島達男「時の海-東北」プロジェクト
 タイム設定ワークショップ(9/24開催)のためのデモンストレーション展示
 9/10~11/9
 Special Exhibit: A Demonstration of Tatsuo Miyajima's Sea of Time - TOHOKU
 Project (9/10-11/09) *A Time Setting Workshop will be held on 9/24.




上段左より
宮島達男「時の海-東北」プロジェクト(参考イメージ)撮影:Nobutada Omote【第2期】/「仏涅槃図」一幅 桃山時代【第1期】/白髪一雄「無題」1964年【第2期】/榎倉康二「干渉 (STORY - No.16)」
1991年【第2期】/大野智史「prism violet」2007年【第2期】/「葡萄栗鼠蒔絵提重」江戸~明治時代【第2期】/李禹煥「対話」2012年【第2期】/ジョナサン ポロフスキー「チャタリングマンと6枚
のドローイング」1987年(部分)【第2期】

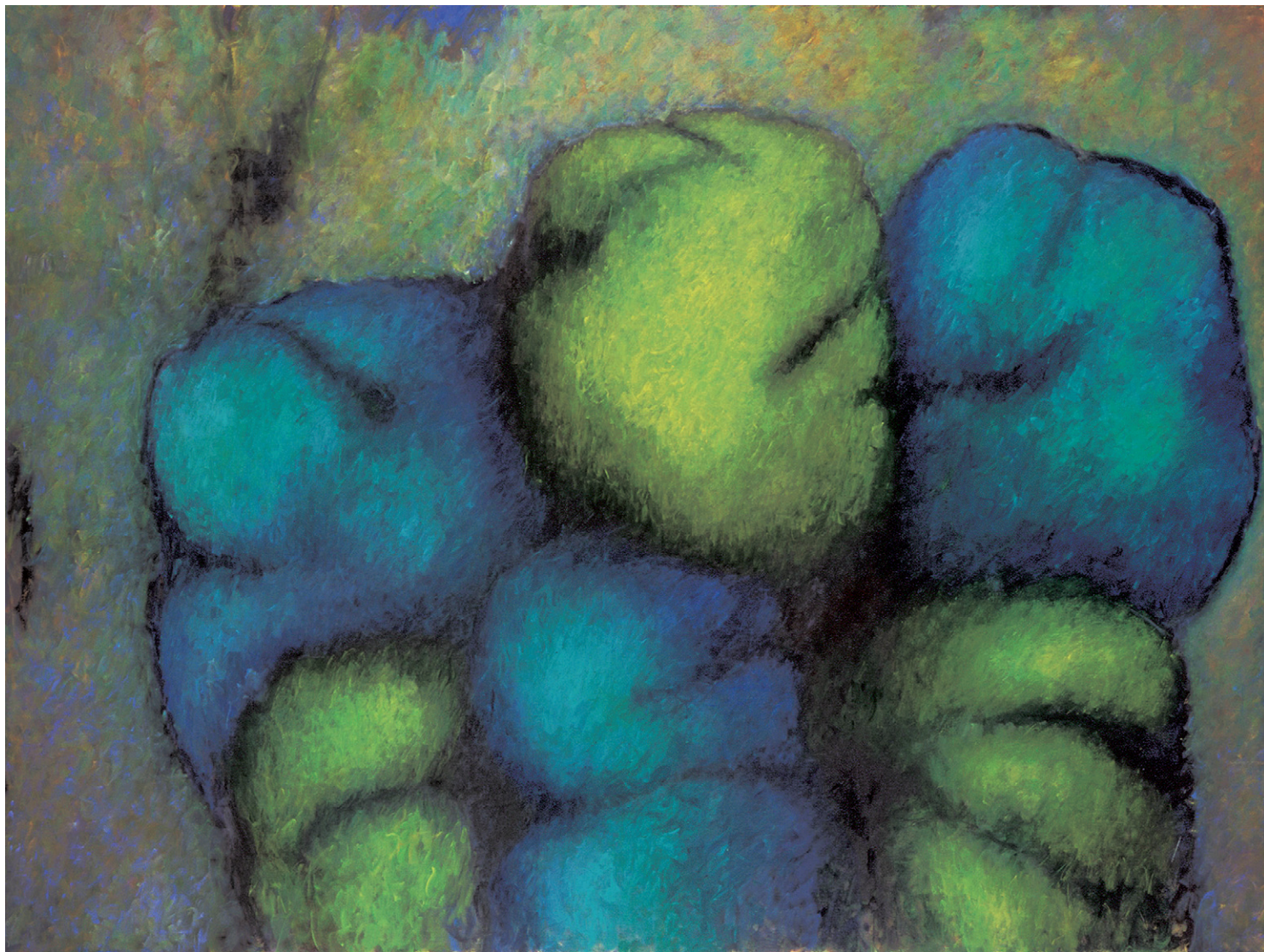
From top left
Tatsuo Miyajima, Sea of Time - TOHOKU Project (reference image) Photo by Nobutada Omote [Part II]/Scene of mournful assembly at the death of Buddha, hanging scroll, Momoyama period [Part I]
Kazuo Shiraga, Untitled, 1964 [Part II]/Koji Enokura, Intervention (STORY - No.16), 1991 [Part II]/Satoshi Ohno, prism violet, 2007 ©Satoshi Ohno [Part II]/Tier of boxes decorated with squirrels
and vine scrolls design in maki-e, Edo-Meiji period [Part II]/Lee Ufan, Dialogue, 2012 ©Lee Ufan [Part II]/Jonathan Borofsky, Chattering Man with Six Drawings, 1987 (detail) ©Jonathan Borofsky
[Part II]

雲をつかむ 原美術館／原六郎コレクション

第1期 [春夏季]: 2022年3月19日(土)－9月4日(日)

第2期 [秋冬季]: 2022年9月10日(土)－2023年1月9日(月・祝)

原美術館ARC



Grasping at Clouds

Works from the Hara Museum and
the Hara Rokuro Collections

Part I: March 19 (Sat.) – September 4 (Sun.), 2022

Part II: September 10 (Sat.), 2022 – January 9 (Mon.), 2023

Hara Museum ARC

出品作家(予定)

第1期[春夏季]

現代美術: エレーナ アルメイダ/井田照一/内倉ひとみ/笹口数/杉本博司
須田悦弘/ビエール スーラージュ/辰野登恵子/野村仁/ナム ジュン バイク
藤本由紀夫/宮脇愛子/森村泰昌/山口長男/吉田克朗/エドワード ルシェ
ジャン=ピエール レイノー/リチャード ロング など
古美術: 狩野派「蘭亭図」(三井寺旧日光院客殿障壁画)/円山応挙「淀川両岸図巻」
(下図)/「仏涅槃図」/「ぶりぶり蒔絵徳利提」 など

第2期[秋冬季]

現代美術: 榎倉康二/大野智史/加藤泉/白髪一雄/中村一美
鳴海暢平/堀浩哉/ジョナサン ボロフスキー/増田佳江/ジャック モノリー
トレイシー モファット/森弘治/横尾忠則/吉田克朗/李禹煥 など
古美術: 狩野派「帰去来・放白鷗図」(三井寺旧日光院客殿障壁画)
円山応挙「淀川両岸図巻」(下図) など

長期展示: オラファー エリアソン「Sunspace for Shibukawa」
アニッシュ カプーア「虚空」/草間彌生「ミラールーム(かぼちゃ)」
鈴木康広「日本列島のベンチ」/東芋「真夜中の海」/奈良美智「My Drawing Room」
宮島達男「時の連鎖」/森村泰昌「輪舞(双子)」 など

Featured Artists (slated)

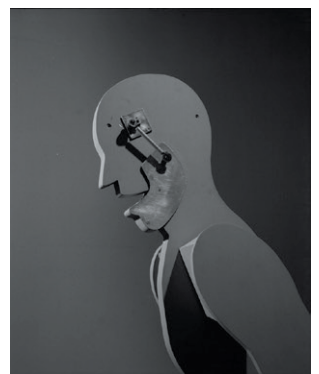
Part I Spring-Summer

Contemporary Art: Helena Almeida / Yukio Fujimoto / Shoichi Ida / Richard Long
Aiko Miyawaki / Yasumasa Morimura / Hitoshi Nomura / Nam June Paik / Jean-Pierre
Raynaud / Edward Ruscha / Kazz Sasaguchi / Pierre Soulages / Yoshihiro Suda
Hiroshi Sugimoto / Toeko Tatsuno / Hitomi Uchikura / Takeo Yamaguchi / Katsuro
Yoshida and others
Traditional Art: Kano school, Scene based on an old Chinese anecdote "Assembly at
the Orchid Pavilion"* / Maruyama Okyo, Sketch of Yodo River / Scene of mournful
assembly at the death of Buddha / Pair of Satsuma ware sake bottles with portable
maki-e case and others

Part II Autumn-Winter

Contemporary Art: Jonathan Borofsky / Koji Enokura / Kosai Hori / Izumi Kato / Kae
Masuda / Tracey Moffatt / Jacques Monory / Hiroharu Mori / Kazumi Nakamura
Nobuhira Narumi / Satoshi Ohno / Kazuo Shiraga / Lee Ufan / Tadanori Yokoo
Katsuro Yoshida and others
Traditional Art: Kano school, Scene based on an anecdote by Tao Yuanming (poet of
the Jin dynasty)* / Maruyama Okyo, Sketch of Yodo River and others
* Part of paintings used for wallpaper and sliding doors at Nikko-in guest hall in
Mi'idera temple.

Parts I and II: Olafur Eliasson, Sunspace for Shibukawa / Anish Kapoor, Void / Yayoi
Kusama, Mirror Room (Pumpkin) / Tatsuo Miyajima, Time Link / Yasumasa Morimura,
Rondo (Twins) / Yoshitomo Nara, My drawing Room / Yasuhiro Suzuki, Bench of the
Japanese Archipelago / Tabaimo, Midnight Sea and others



上段左より

ジャン=ピエール レイノー「試験管 II」1978年【第1期】/「仏涅槃図」一幅 桃山時代【第1期】/山口長男「かたち」1952年【第1期】/横尾忠則「誰か故郷を想わざる」2001年【第2期】/榎倉康二「干渉
(STORY - No.16)」1991年【第2期】/大野智史「prism violet」2007年【第2期】/「ぶりぶり蒔絵徳利提」一基 江戸時代【第1期】/白髪一雄「無題」1964年【第2期】/李禹煥「対話」2012年【第2期】
ジョナサン ボロフスキー「チャタリングマンと6枚のドロ잉」1987年(部分)【第2期】

From top left

Jean-Pierre Raynaud, Eprouvette II, 1978 ©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2760 [Part I]/Scene of mournful assembly at the death of Buddha, hanging scroll, Momoyama period [Part I]/Takeo
Yamaguchi, Form, 1952 [Part I]/Tadanori Yokoo, Who Shall Forget about Homeland?, 2001 ©Tadanori Yokoo [Part II]/Koji Enokura, Intervention (Story - No.16), 1991 [Part II]/Satoshi Ohno, prism violet,
2007 ©Satoshi Ohno [Part II]/Pair of Satsuma ware sake bottles with portable maki-e case, Edo period [Part I]/Kazuo Shiraga, Untitled, 1964 [Part II]/Lee Ufan, Dialogue, 2012 ©Lee Ufan [Part II]
Jonathan Borofsky, Chattering Man with Six Drawings, 1987 (detail) ©Jonathan Borofsky [Part II]

「青空は、太陽の反対側にある：原美術館／原六郎コレクション」

会期 第1期（春夏季） 2023年3月24日（土）—9月3日（日）

*古美術展示替え：東京国立博物館寄託作品2点は4月27日、他作品は6月29日を予定

第2期（秋冬季） 2023年9月9日（土）—2024年1月8日（月）

*古美術展示替え：11月9日予定

開催日数（予定） 第1期：147日 第2期：108日 計：255日

*2022年度中の開催日数は7日間（3月24日—31日）

入館者数（3月31日時点の7日間） 779人（1日平均111人）

「青空は、太陽の反対側にある」と題し、「原美術館コレクション」（現代美術）と「原六郎コレクション」（東洋古美術）を春夏季と秋冬季の2期に分け展覧する。

雲ひとつない晴れた日に原美術館 ARC を訪れて最初に目にするもの——それは大きな青空だ。青空と山々の深緑や紅葉、そして青空と端正な黒色の磯崎新建築とのコントラストは、恐らくここでしか見ることのできない感動の光景。しかしよく見ると、青空の青さにはわずかに濃淡がある。輝く太陽の周りは少し白っぽく、太陽から離れるにつれ青さが増してゆく。思い描く理想の青い空は太陽の反対側にある。

本展では、「青空は、太陽の反対側にある」をキーフレーズに、自身の理想を求めて当時の美術的・社会的動向に背を向けた荒川修作や久保田成子、ギルバート&ジョージやヨーゼフ ボイスなど、国内外の作家の表現を展覧する。

現代美術ギャラリーA、B、Cでは、常識や慣習、既存の価値観に抗うことで、または視点を変えることで独自の地平を切り開く作家や、声高ではなくとも社会や美術の潮流に疑問を呈する作家、そして自身の心に深く潜ることで新たな表現を浮上させる作家の作品を展示。

一方、特別展示室 観海庵には、鎖国の江戸期に西洋絵画や科学に傾倒した司馬江漢や、『朦朧体』と揶揄されながらも墨線を否定し、独自の表現を切り開いた横山大観の作品を展示する。また、通常は東京国立博物館に寄託している原六郎コレクション、『青磁下蕪花瓶』（国宝）と『青磁袴腰香炉』が里帰りする（3月24日～4月26日）。両作品とも爽やかな青空色が美しい名品である。さらに、『光悦本』と呼ばれる希少な古活字本である『謡本』を帖替えをしながら通年展示。記録に残る限りでは、『青磁袴腰香炉』は明治45年に東京帝室博物館（現 東京国立博物館）開催の特別展覧会『和漢青磁器』展以来の一般公開、『謡本』は初公開。

輝く太陽にあえて背を向け、順光に映し出される鮮やかな青空と原美術館 ARC を堪能していただく機会とする。

第1期（春夏季）現代美術：艾未未、安藤正子、イェルク インメンドルフ、河原温、リーキット、ギルバート& ジョージ、スラシ クソンウォン、佐藤時啓、須田悦弘、ルフィノー タマヨ、ジャン デュビュッフエ、奈良美智、ゲオルク バゼリッツ、A. R. ペンク、ヨーゼフ ボイス、張洄、やなぎみわ、ジム ランビー、ロイ リキ テンシュタイン、ジャン=ピエール レイノーなど

古美術：『青磁下蕪花瓶』（国宝）、『青磁袴腰香炉』、『青磁水注花入』、『光悦謡本』、狩野派『花鳥図屏風』、『紫陽花蒔 絵重箱』など

第2期（秋冬季）現代美術：カレル アペル、荒川修作、アルマン、アルマンド、アンディ ウォーホル、クレス オルデンバーグ、工藤哲巳、久保田成子、クリスト、ヴィレム デクーニング、篠原有司男、セザール、アントニ タピエス、蜷川実花、エルネスト ネット、森村泰昌、ロバート メイプルソープ、マーク ロスコなど

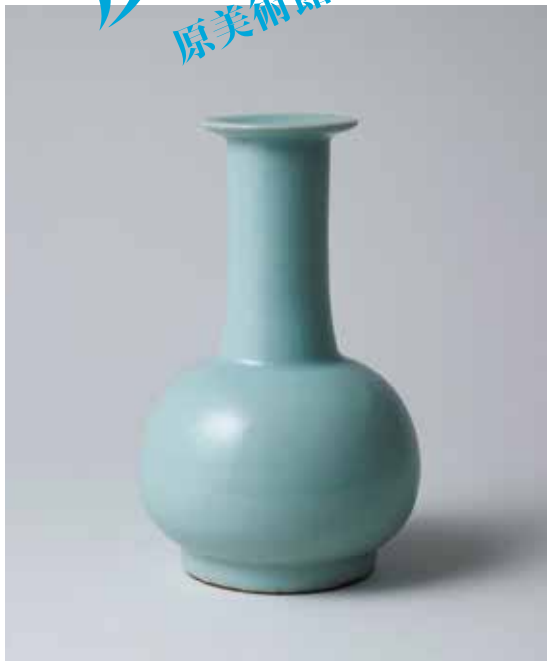
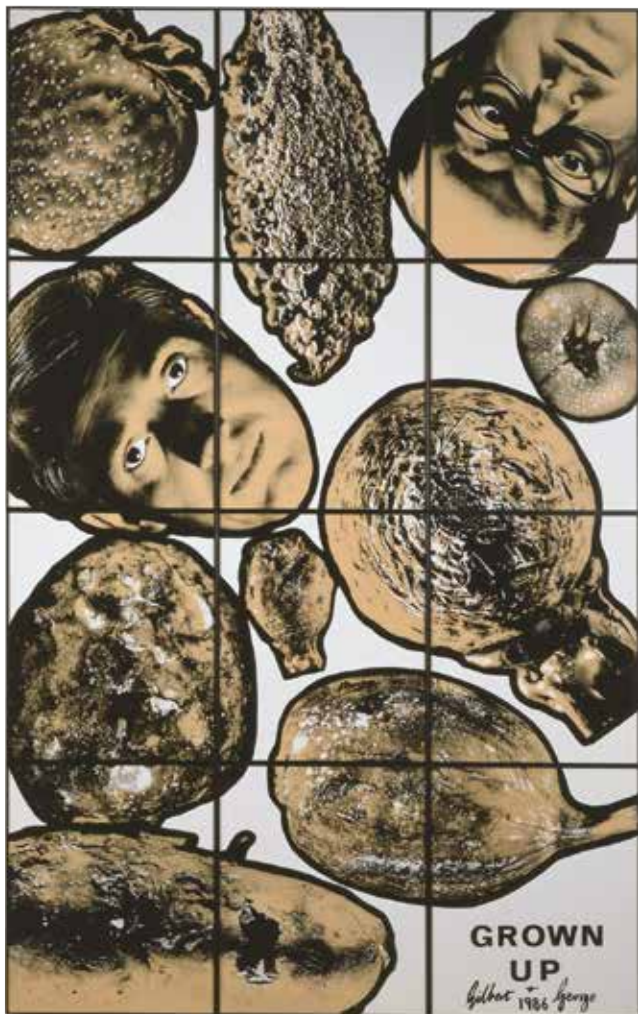
古美術：司馬江漢『富嶽図』、横山大観『海辺曙色図』、『光悦謡本』、本阿弥光悦『蝶下絵和歌巻』（古今和歌集春歌上）など

青空は、 太陽の 反対側にある

原美術館 / 原六郎コレクション

Opposite the Sun Is Where the Blue Sky Lies

Works from the Hara Museum and the Hara Rokuro Collections



第1期 [春夏季] 2023年3月24日(金) - 9月3日(日)

第2期 [秋冬季] 2023年9月 9日(土) - 2024年1月8日(月・祝)

Part I: March 24 (Friday) - September 3 (Sunday), 2023

Part II: September 9 (Saturday), 2023 - January 8 (Monday/national holiday), 2024

ギルバート&ジョージ「成熟」1986年【第1期】

国宝「青磁下蕪花瓶」南宋時代 撮影:上野剛宏【展示期間:3月24日~4月26日】

篠原有司男「シマウマとライオンのイチゴ合戦」1992年 撮影:木暮伸也【第2期】

Gilbert & George, *Grown Up*, 1986 ©Gilbert & George [Part I]

National Treasure Celadon vase with long neck on globular body, Southern Song dynasty

Photo by Norihiro Ueno [On display from March 24 to April 26]

Ushio Shinohara, *Strawberry Battle of Zebra and Lions*, 1992 ©Ushio Shinohara Photo by Shinya Kigure [Part II]

国宝
「青磁下蕪花瓶」
お里帰り!
4/26まで公開

青空は、太陽の反対側にある

雲ひとつない晴れた日に原美術館ARCを訪れて最初に目にするもの——それは大きな青空です。青空と山々の深緑や紅葉、そして青空と端正な黒色の磯崎新建築とのコントラストは、恐らくここでしか見ることでできない感動の光景。しかしよく見ると、青空の青さにはわずかに濃淡があります。輝く太陽の周りは少し白っぽく、太陽から離れるにつれ青さが増してゆく。思い描く理想の青い空は太陽の反対側にあります。

If you visit Hara Museum ARC on a clear, cloudless day, the first thing you will notice is the expansive sky spreading out before you. The contrast between the blue of the sky and the deep green of the mountains, the autumn color of the leaves and the stark black of Arata Isozaki's architecture presents an awe-inspiring sight not to be found elsewhere. Averting your gaze from the white glare of the sun, you will notice that the blue of the sky becomes deeper the further away you look, becoming its deepest and most beautiful at the furthest points opposite the sun.

青空は、太陽の反対側にある：原美術館／原六郎コレクション

第1期[春夏季] 2023年3月24日(金)ー9月3日(日)

第2期[秋冬季] 2023年9月9日(土)ー2024年1月8日(月・祝)

*特別展示室「観海庵」は、第1期、第2期ともに会期中各1回の展示替えがあります。

Opposite the Sun Is Where the Blue Sky Lies: Works from the Hara Museum and the Hara Rokuro Collections

Part I: March 24 (Friday) – September 3 (Sunday), 2023

Part II: September 9 (Saturday), 2023 – January 8 (Monday/national holiday), 2024

* One change of exhibits will take place at the Kankai Pavilion during Part I and Part II of the exhibition.

本展では、「青空は、太陽の反対側にある」をキーワードに、自身の理想を求めて当時の美術的・社会的動向に背を向けた荒川修作や久保田成子、ギルバート&ジョージやヨーゼフボイスなど、国内外の作家の表現を展覧します。

まず、現代美術ギャラリーA・B・Cでは、常識や慣習、既存の価値観に抗うことで、または視点を変えることで独自の地平を切り開く作家や、声高ではなくとも社会や美術の潮流に疑問を呈する作家、そして自身の心に深く潜ることで新たな表現を浮上させる作家の作品をご覧ください。

一方、特別展示室・観海庵には、鎖国の江戸期に西洋絵画や科学に傾倒した司馬江漢や、「朦朧体」と揶揄されながらも墨線を否定し、独自の表現を切り開いた横山大観の作品を展示します。また、通常は東京国立博物館に寄託している原六郎コレクション、『青磁下蕪花瓶』(国宝)と『青磁袴腰香炉』がお里帰り(展示期間:3月24日~4月26日)。どちらも爽やかな青空色が美しい名品です。さらに、「光悦本」と呼ばれる希少な古活字本である『謡本』を帖を替えながら通年展示。記録に残る限りでは、『青磁袴腰香炉』は明治45年に東京帝室博物館(現 東京国立博物館)開催の特別展覧会「和漢青磁器」展以来の一般公開、『謡本』は初公開となります。

輝く太陽にあえて背を向け、順光に映し出される鮮やかな青空と原美術館ARCをどうぞご堪能ください。

If the sky were the art world, then the sun would be where the mainstream and more orthodox expression dominate, while the areas opposite the sun are where artists break new ground by defying conventional wisdom and current values, adopt different points of view, question social and artistic trends in their own quiet ways and dive deep within themselves to find new ways of expression. The works by such artists from Japan and abroad, including Shusaku Arakawa, Shigeko Kubota, Gilbert & George and Joseph Beuys, are presented in Galleries A, B and C.

On display in the special exhibition space Kankai Pavilion will be works by Shiba Kokan, who devoted himself to Western painting and science during the Edo period when Japan was closed to the world, and Yokoyama Taikan, who rejected the traditional reliance in Japanese painting on line and pioneered his own style, despite being pejoratively dubbed "morotai" or "vague." Also on view will be beautiful masterworks exquisitely colored sky blue: *Celadon vase with long neck on globular body* (National Treasure) and *Celadon glazed incense burner* (on display from March 24 to April 26), two works from the Hara Rokuro Collection which are normally kept at the Tokyo National Museum; and *Koetsu-bon*, rare specimens of Noh librettos, or *Utaibon*, the selection of which will be varied throughout the year in both Part I and Part II. According to existing records, *Celadon glazed incense burner* last appeared in the special exhibition *Japanese and Chinese Celadon Ware* that was held at the Tokyo Imperial Household Museum (now Tokyo National Museum) in 1902. The Noh librettos, on the other hand, are being shown to the public for the first time ever.

So why not come to Hara Museum ARC where you can turn your gaze away from dazzling sunlight and enjoy the beautiful blue sky and the museum buildings spreading out before you?



上段左より
From top left

奈良美智「My Drawing Room」2004/2021年
Yoshitomo Nara, *My Drawing Room*, 2004/2021
©Yoshitomo Nara

*「My Drawing Room」内全作品貸出しのため、第2期は作家による特別展示になります。
* This work will be on loan during Part II. A special exhibit by the artist will be displayed instead.

森村泰昌「輪舞(双子)」1994/2021年
Yasumasa Morimura, *Rondo (Twins)*, 1994/2021
©Yasumasa Morimura

宮島達男「時の連鎖」1989/1994/2021年
Tatsuo Miyajima, *Time Link*, 1989/1994/2021
©Tatsuo Miyajima

草間彌生「ミラールーム(かぼちゃ)」1991/1992年
Yayoi Kusama, *Mirror Room (Pumpkin)*, 1991/1992
©Yayoi Kusama

鈴木康広「日本列島のベンチ」2014/2021年
Yasuhiro Suzuki, *Bench of the Japanese Archipelago*, 2014/2021 ©Yasuhiro Suzuki

以上撮影:木暮伸也
Photos by Shinya Kigure

オラファー エリアソン「Sunspace for Shibukawa」2009年
Olafur Eliasson, *Sunspace for Shibukawa*, 2009
©2009 Olafur Eliasson



出品作家(予定)

第1期[春夏季]

現代美術: 艾未未(アイ ウェイウェイ)/安藤正子/イェルク インメンドルフ
河原温/リー・キット/ギルバート&ジョージ/スラシ クソンウォン/佐藤時啓
須田悦弘/奈良美智/ゲオルク ハゼリッツ/A. R. ペンク/ヨーゼフ ボイス
やなぎみわ/横尾忠則/ジム ランビー/ロイ リキテンシュタイン
ジャン=ピエール レイノー など

古美術: 「青磁下蕪花瓶」(国宝)/「青磁袴腰香炉」/「光悦謡本」/狩野派「花鳥
図屏風」(三井寺旧日光院客殿障屏画)/「軍配に鉄仙蒔絵刀筒」/本阿弥光悦
「蝶下絵和歌巻(古今和歌集春歌上)」など

第2期[秋冬季]

現代美術: 荒川修作/カレル アベル/アルマン/アルマンド
クレス オルデンバーク/工藤哲巳/久保田成子/クリスト/ヴィレム デ クーニング
篠原有司男/アントニ タビエス/蜷川実花/エルネスト ネット
ロバート メイブルソープ/森村泰昌 など

古美術: 司馬江漢「富嶽図」、横山大観「海辺曙色図」/「光悦謡本」など

長期展示: オラファー エリアソン「Sunspace for Shibukawa」

アニッシュ カプーア「虚空」/草間彌生「ミラールーム(かぼちゃ)」

鈴木康広「日本列島のベンチ」/束芋「真夜中の海」

奈良美智「My Drawing Room」/宮島達男「時の連鎖」

森村泰昌「輪舞(双子)」など

Featured Artists (slated)

Part I Spring-Summer

Contemporary Art: Masako Ando/ Georg Baselitz/ Joseph Beuys/ Gilbert & George/ Jörg Immendorff/ On Kawara/ Lee Kit/ Surasi Kusolwong
Jim Lambie/ Roy Lichtenstein/ Yoshitomo Nara/ A. R. Penck/Jan-Pierre Raynaud
Tokihiko Sato/ Yoshihiro Suda/ Ai Weiwei/ Miwa Yanagi/ Tadanori Yokoo and others

Traditional Art: Celadon vase with long neck on globular body/ Celadon glazed
incense burner/ Koetsu Utaibon/ Kano school, Birds and flowers*/ Case of a sword
decorated with clematis and war fan patter design in maki-e/ Hon'ami Koetsu,
Waka poem "Kokin Waka-shu," first part of "Spring" chapter with painted ground
and butterfly design and others

* Part of paintings used for wallpaper and sliding doors at Nikko-in guest hall in
Mi'idera temple.

Part II Autumn-Winter

Contemporary Art: Shusaku Arakawa/ Karel Appel/ Arman/ Armando/ Christo
Willem de Kooning/ Shigeo Kubota/ Tetsumi Kudo/ Robert Mapplethorpe
Yasumasa Morimura/ Ernesto Neto/ Mika Ninagawa/ Claes Oldenburg
Ushio Shinohara/ Antoni Tàpies and others

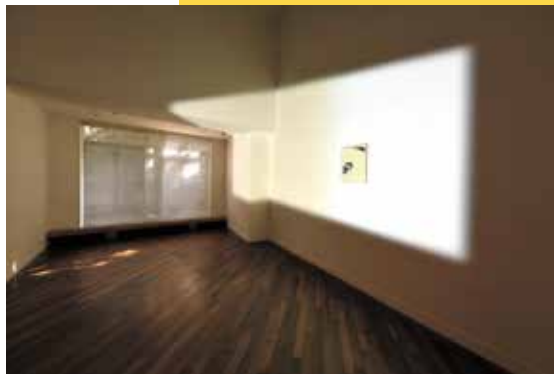
Traditional Art: Shiba Kokan, Landscape of Mt. Fuji/ Yokoyama Taikan, Seaside
landscape with sunrise/ Koetsu Utaibon and others

Parts I and II: Olafur Eliasson, Sunspace for Shibukawa/ Anish Kapoor, Void

Yayoi Kusama, Mirror Room (Pumpkin)/ Tatsuo Miyajima, Time Link

Yasumasa Morimura, Rondo (Twins)/ Yoshitomo Nara, My drawing Room

Yasuhiro Suzuki, Bench of the Japanese Archipelago/ Tabaimo, Midnight Sea and others



上段左より

スラシ クソンウォン「Small is Beautiful- Floating Market」2001年/艾未未「毛像組 1」1985年
やなぎみわ「My Grandmothers: AI」2003年/佐藤時啓「光一呼吸 HaraArc #3」2020年
リー・キット「Flowers」2018年(原美術館での展示風景)/ジャン=ピエール レイノー「十字架」
1972年/横尾忠則「戦後」1985年/奈良美智「Eve of Destruction」2006年/「軍配に鉄仙蒔絵
刀筒」江戸時代/本阿弥光悦「蝶下絵和歌巻(古今和歌集春歌上)」江戸時代(部分)

From top left

Surasi Kusolwong, Small is Beautiful- Floating Market, 2001 ©Surasi Kusolwong/ Ai Weiwei, Mao
Images 1, 1985 ©Ai Weiwei/ Miwa Yanagi, My Grandmothers: AI, 2003 ©Miwa Yanagi/ Tokihiko
Sato, Photo-Respiration HaraArc#3, 2020 ©Tokihiko Sato/ Lee Kit, Flowers, 2018 ©Lee Kit
(Installation view at Hara Museum of Contemporary Art)/ Jean-Pierre Raynaud, Croix, 1972
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G3070/ Tadanori Yokoo, Post War, 1985 ©Tadanori
Yokoo/ Yoshitomo Nara, Eve of Destruction, 2006 ©Yoshitomo Nara/ Case of a sword
decorated with clematis and war fan patter design in maki-e, Edo period/ Hon'ami Koetsu, Waka poem
"Kokin Waka-shu," first part of "Spring" chapter with painted ground and butterfly design, Edo
period (detail)

B. 普及事項

【1】 講演会、教育プログラム等

本年度は下記の通り、16件のイベントを開催した。

1. 2022 春のバスツアー

日時：2022年4月17日（日） 集合 8:15・バス発車 8:30～バス到着・解散 19:00

桜の開花時期にあわせた新宿発着のバスツアー。コロナ対策を考慮し、30名限定とした（一般・メンバーとも参加可）。開催中の展覧会「雲をつかむ：原美術館／原六郎コレクション」自由鑑賞の他、希望者には、学芸員による開架式収蔵庫ツアーも行った（15名×2回開催）。カフェ ダールでのランチに加え、19品種 1500本の桜が植えられた、伊香保グリーン牧場の桜の名所「榛名雲海桜」やシープドッグショー、ソフトクリームもあわせて楽しめる内容とした。

参加人数：29名

催行会社：国際急行観光株式会社

2. Art in Town: 伊豆高原

日時：2022年5月15日（日） 13:00～16:30

メンバーの皆様にご覧以外でのアート体験をお楽しみいただく企画「Art in Town」の一環。伊豆半島の海を見下ろす広大な敷地の中にある、白磁の陶芸家・黒田泰蔵氏が生前暮らした住居とアトリエ、そして安藤忠雄氏が設計した5坪の小さなギャラリーを見学した。当日は、千住博氏の襖絵の飾られた、吉村順三氏設計による大徳寺の聚光院伊東別院も訪問。特別な場所に設置されたアートに触れる、貴重な機会となった。

参加人数：18名

3. 開架式収蔵庫ツアー

日時：2022年5月28日（第1期） 11:00、2023年1月7日（第2期） 11:00 ※2回開催

開催中の展覧会「雲をつかむ：原美術館／原六郎コレクション」展 担当学芸員の坪内雅美による、メンバー限定の開架式収蔵庫ツアー。通常は非公開の開架式収蔵庫内で、当館の所蔵作品や開催中の展覧会について解説する機会とした。

参加人数：5月28日（第1期）11名、1月7日（第2期）9名

4. 内田輝コンサート silk road

日時：2022年6月11日（土） 18:00～19:30

アーティスト内田輝によるコンサート。楽器演奏だけでなく、音の調律、楽器製作、音のワークショップといった独自の活動を行っている内田。今回は、自らが製作したクラヴィコード（14世紀に考案された鍵盤楽器）を、特別に閉館後のギャラリーAで演奏した。人の声よ

りも小さく繊細なものとされるクラヴィコードが奏でる音を、日没にかけてゆっくりと移ろいゆく光とともに体感するという、通常とは異なる音楽・美術鑑賞体験を提供する試みとした。ギャラリーAでは杉本博司「仏の海」を展示。当日、開演前に青野館長によるミニギャラリーガイドも開催した。

参加人数：30名

5. ライアン・ガンダー展 特別ギャラリーガイド

日時：2022年7月23日（日）11:30

注目の展覧会を見学する、原美術館 ARC メンバーシップ会員のための特別プログラムとして、東京オペラシティアートギャラリーにて開催の展覧会「ライアン・ガンダー われらの時代のサイン」特別ギャラリーガイドを行った。同館 企画担当の野村しのぶ氏と館内を巡りながら展覧会の見どころや作品について伺った。

参加人数：21名

6. 夏休みワークショップ アートうちわをつくろう！

日時：2022年7月29日、30日、31日 各日10時～/13時～/15時～

夏休み期間に合わせて、大人から子どもまで楽しめるワークショップを企画。

当館では毎年恒例のワークショップではあったが、コロナ禍もあり4年ぶりの開催となった。参加者は折りたたんだ和紙を、顔料インクで思い思いに染め、広げてうちわに仕上げる。主に親子での来館者や小学生をターゲットに、簡単なワークショップを通して作品を作る楽しみを育み、また出来上がりの違いや個性を比べてみることで美術に親しむ感性を養うことを目的としている。

参加人数：のべ64名

7. 群馬大学共同教育学部実習 手話通訳者養成のための現場研修

日時：2022年8月6日（土）10:00～13:00

群馬大学共同教育学部で手話通訳を学ぶ学生の実践実習を行う。

手話を学ぶ大学生と、ろう者、当館の学芸員がグループとなり、展示作品を見ながら対話を試みる。学芸員が作品の説明を行い、それを学生がろう者に向けて手話で通訳し、質問や感想についても手話を通してその場で丁寧に共有することで、言語や音情報に頼らないコミュニケーションの難しさについて改めて考察する機会となった。

学生にとっては、言葉でも説明の難しい作品情報を瞬時に手話で置き換えることの実践経験となり、同時に当館学芸員にとっても、なるべく専門用語を省き、手話通訳のペースに合わせて解説をする工夫が求められる点で様々な気付きがあった。この回は好評を得て、次年度以降も定期的に開催する予定である。

参加人数：13名（大学生9名、教員4名）

協力：群馬大学共同教育学部

8. 李禹煥展 特別ギャラリーガイド

日時：2022年8月19日（金） 18:30～20:00

注目の展覧会を見学する、原美術館 ARC メンバーシップ会員のための特別プログラムとして「国立新美術館開館15周年記念 李禹煥」特別レクチャーと展覧会自由鑑賞を行った。当日は、国立新美術館 主任研究員の米田尚輝氏より、展覧会について解説いただいたのち各自で自由に展覧会を鑑賞した。

参加人数：19名

9. 次世代リーダーのための感性育成プログラム①

原美術館 ARC×ワークショップ バスツアー

キッズワークショップ 笹口数「真夏の空の真冬の星 真昼の空の夜の鳥」

日時：2022年9月4日（日）8:00（集合・バス出発）～19:30（バス到着・解散）

「次世代リーダーのための感性育成プログラム」の第一回目として、親子での参加者を募集し、東京都（品川区）と原美術館 ARC を往復するバスツアーを開催。参加者は展覧会の見学の後、ワークショップに参加するというプログラムを行った。

ワークショップは、展覧会出品作家である笹口数氏を講師に迎え、展覧会のタイトル「雲をつかむ 原美術館/原六郎コレクション」にちなみ、人知れず大空を飛ぶ「夜の鳥」を想像し、紙と針金で制作するというもの。参加者は親子や大人と子どものペアとなり、胴体や羽、くちばしの大きさや全体の大きさを思い浮かべながら、針金や銀紙で覆い、協力しながら形を整える。

こうして完成した「夜の鳥」を、館内の前庭に設置し、真昼の空の下で羽ばたかせることで、目に見えない世界を想像させるワークショップとなった。

参加人数：18名

助成：一般財団法人 MRA ハウス

協力：笹口数

10. 次世代リーダーのための感性育成プログラム②

美術を学ぶ学生のためのバスツアー×宮島達男 特別レクチャーとタイム設定ワークショップ

日時：2022年9月23日 8:30（集合・バス出発）～18:30（バス到着・解散）

「次世代リーダーのための感性育成プログラム」の第二回目として、美術を学ぶ学生を対象とした東京都（新宿）と原美術館 ARC を往復するバスツアーを開催。

当日は、県内からの参加者も合流し、学芸員による展覧会の作品解説や、普段は非公開の開架式収蔵庫のガイドツアーを行った。大学では学べない美術の現場の「裏側」を知る貴重な機会になったと学生からは好評を得た。また、国際的に活躍する宮島達男氏による特別レクチャーや「時の海—東北」のタイム設定ワークショップも併せて開催。タイトなスケジュールではあったが、現代アートの魅力に多角的に浸れる、満足度の高い一日となった。

参加人数：25名

助成：一般財団法人MRAハウス

協力：宮島達男、「時の海 - 東北」プロジェクト実行委員会

11. 宮島達男「時の海—東北」プロジェクトタイム設定ワークショップ

日時：2022年9月23日（金・祝）14時10分～

24日（土）1回目：11時～／2回目：14時～

「それは変化し続ける」「それはあらゆるものと関係を結ぶ」「それは永遠に続く」というコンセプトに基づき、生命の永遠性を象徴するデジタルカウンターの数字を用いて、生と死、命について表現し続ける宮島達男。当館の所蔵作家でもある宮島氏を迎え、彼が手掛ける「時の海-東北」プロジェクトの一環となるワークショップを開催した。

このワークショップでは、参加者が9、8、7、6...と、数字が切り替わるタイミングの速さを各自が希望する秒数に設定し、各人1つのカウンターを制作するというもの。選んだ数字や東日本大震災にまつわるエピソード、東北への想いや大切な人へのメッセージを参加者同士が対話を通して共有し合うことで、手のひらのカウンターとともに、東北大震災前後の時間を一度巻き戻すような、あるいは止まっていた時間をふたたび動かすようなメッセージが込められている。

こうして各地から寄せられた小さなカウンターは、やがて「時の海 - 東北」プロジェクトとして大きな一つの作品となることを目指して、現在も各地でワークショップが行われている。

参加人数：88名（2日間）

協力：宮島達男、「時の海 - 東北」プロジェクト実行委員会

12. 令和4年度AIRアートプロジェクト「エデュケーションプログラム」

江上越 つたわるかな？

日時：2022年10月16日 13:00～15:00

群馬県教育文化事業団主催による「令和4年度AIRアートプロジェクト」のプログラムの一環で、同プロジェクト参加作家の江上越氏によるワークショップを当館で開催。

江上氏は現在、日本と中国を拠点に、ドイツ留学を機にヨーロッパでも活動の場を広げている注目の作家であり、海外生活の実体験から制作を通じて「コミュニケーション」の本質を探るような作品を手掛ける。今回のワークショップは二部構成で行われ、前半は、辞書の中からある単語の説明を引用し、参加者は想像したものを描くというもの。犬、山、ゾウなど、誰もが知っているものでも認識の違いがあることを視覚的に表現した。第二部は、1枚の絵を言葉で次々に説明していく「伝言ゲーム」を実施。目で得た情報を音で伝えていく過程でどのように変化するのか、またそれぞれの人の認識の違いが重なると最終的には全く別の情報に作り変えられることを、参加者は楽しみながら学んだ。

参加人数：20名

主催：公益財団法人群馬県教育文化事業団、群馬県、原美術館 ARC

後援：群馬県教育委員会

13. Art in Town: 游庵

日時：2022年11月5日（日）13:30～14:30

大林剛郎氏のコレクションを展示するためのプライベートスペース「游庵」(完全非公開)に、原美術館 ARC のメンバーを特別にご招待いただいた。安藤忠雄氏設計による建物やオラファー・エリアソンなどの常設作品をはじめ、大林氏ご自身のキュレーションによる巨匠たちの若い頃の作品に焦点をあてたセレクションや、期間限定で展示された、さわひらき氏のインスタレーションなどを鑑賞した。当日は大林氏も在廊され、直接お話をうかがうことのできる、またとない機会となった。

参加人数：28名

14. 「EUGENE STUDIO」スタジオヴィジット

日時：2022年12月11日（日）12:30～16:00

東京都現代美術館の個展が記憶に新しいアメリカ生まれの作家 寒川裕人氏による「ユージーン・スタジオ」の埼玉のスタジオを訪れる、原美術館 ARC メンバー限定のイベント。作品を「体験」できる小さな美術館のような場所を訪問する、またとない機会となった。寒川氏のご厚意により急遽開催となった。

参加人数：7名

15. 次世代リーダーのための感性育成プログラム③

日時：2022年12月26日 10:00（集合・バス出発）～15:30（バス到着・解散）

「次世代リーダーのための感性育成プログラム」の三回目として、留学生を対象としたバスツアーを開催。

今回は地元の群馬大学共同教育学部の協力のもと、「グローバルアートツアー」と称して、留学生の他、日頃よりグローバルな視点を身につけるために英語や翻訳を学ぶ学生、学生チューター、GFL（グローバルフロンティアリーダー）などが参加。電車の乗り換え等にやや不安があるとの声から大学前発着のバスを用意した。美術館到着後は、当館学芸員を交えて作品の解説を翻訳し、感想を交換しあい、またカフェでのランチや、隣にあるグリーン牧場内を自由に散策。大学とは環境を変えることで、学生に新しい気づきを促し、またコロナ禍もあり2年以上本国に帰ることのできない留学生にとっても有意義な時間となった。

参加人数：22名（学生16名、教員6名）

助成：一般財団法人 MRA ハウス

協力：群馬大学共同教育学部

16. 六本木クロッシング ギャラリーガイド

日時：2023年2月4日（土）17:00～

注目の展覧会を見学する、原美術館 ARC メンバーシップ会員のための特別プログラムとして森美術館で3年に一度開催される「六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ！」を訪問。ゲストキュレーターの天野太郎氏（東京オペラシティアートギャラリー チーフ・キュレーター）と館内をめぐりながら、お話を伺った。

参加人数：16名

【2】外部協力

青野和子

東京都現代美術館 美術資料収蔵委員会委員

群馬県文化審議員

群馬県 AIR アートプロジェクト運営委員

群馬県博物館連絡協議会 副会長

渡辺純子

アジアン・カルチュラル・カウンシル日本財団 理事

坪内雅美

学習院大学 非常勤講師

【3】所蔵作品の貸し出し

(1)貸出先:国立新美術館、兵庫県立美術館

期間:2022年7月22日-2023年3月2日

理由:「国立新美術館開館15周年記念 李禹煥」展への貸し出し出品のため

会期:国立新美術館 2022年08月10日-11月7日

兵庫県立美術館 2022年12月13日-2023年2月12日

作家名:李禹煥

作品名:『線より』(1979年)、『風と共に』(1990年) 計2点

*『風と共に』は、国立新美術館のみでの展示となった

(2)貸出先:金沢21世紀美術館

期間:2022年9月22日-2023年3月10日

理由:「時を超えるイヴ・クラインの想像力—不確かさと非物質的なるもの」展への貸し出し出品のため

会期:2022年10月1日-2023年3月5日

作家名:ルチオ・フォンタナ

作品名:『空間概念』(1953年) 計1点

(3)貸出先:京都国立博物館

期間:2022年10月8日-12月4日

理由:「京に生きる文化 茶の湯」展への貸し出し出品のため

会期:2022年10月8日-12月4日

作品名:『青磁下蕪花瓶』(南宋時代) 計1点

【4】学校、団体来館の記録

<内訳>中学校・高等学校1件、大学5件、一般団体他49件 477名

詳細

・学校団体6件

白百合学園中学高等学校(25名) 前橋工科大学(4名) 群馬大学共同教育学部(13名)

国士舘大学理工学部建築学科(18名)、東京藝術大学美術学部(7名)、

共立女子大学造形芸術コース(20名)

・一般団体15件

白井屋ホテル/NOMON株式会社(15名)、女子美術大学群馬支部OG会(16名)、

イスラエル・ティコティン美術館関係者(20名) 他

・関越交通定期観光バス 30回催行(84名)

・その他(MRAハウス助成バスツアー等) 4件(96名)

【5】ポスター・チラシなどの作成配布

		ポスター	チラシ
「虹をかける:原美術館/原六郎コレクション」	第1期	100枚	30,000枚
	第2期	100枚	25,000枚
「青空は、太陽の反対側にある:原美術館/原六郎コレクション」	第1期	100枚	30,000枚

C. 広報

原美術館ARC

取材件数 178件(和文媒体 174件/外国語媒体 4件)

<和文媒体>174件

令和4年度も引き続きコロナ禍であったため、展覧会のオープングレセプションは第1期、第2期とも

開催せず、4月11日、12日に担当学芸員によるプレスを対象としたガイドツアーを行った。通年開催の「コレクション展」は話題になりにくい傾向ではあるが、笹口数、宮島達男両氏の展覧会出品作家によるイベント開催、ワークショップ、また春の満開の桜などで細かく情報を発信しつつ、併せて開催中の展覧会を取り上げていただく機会を増やした。地元の新聞社(上毛新聞)での掲載や、テレビ局(群馬テレビ)での放映後は特に反響があり、「原美術館ARC」として県内の認知度も上がってきた。内田輝コンサート、うちわワークショップ等、イベント単体での取材掲載もあり、こちらも館の広報活動に効果があった。施設紹介では、ラジオ「MOTORING MUSIC」(J-WAVE)で伊香保エリアの紅葉の時期に青野館長による館紹介のインタビューが放送されるなど、ドライブ、伊香保温泉といったレジャー・観光情報とあわせての紹介が中心となった。統合3年目となる次年度は、原美術館から移設した屋外常設作品、またコレクションの質の高さとともに、展覧会の内容や館の魅力をより効果的に広めることが引き続きの課題となる。その方法についても積極的に探っていきたい。なお、館公式のtwitter はフォロワー数123,150人から122,478人と減少した一方、Instagramは31,121人から約32,000人へと増加している。

<外国語媒体> 4件

2022 年末には海外からの観光客数規制を緩和する動きが加速し、コロナ禍に開館した原美術館 ARC にもいよいよ外国人の来館が期待される。そこで、海外からの観光客を受け入れる準備として今からできること、都内から美術館までのアクセスの再確認や、館内配布物に記載する情報の更新について検討した。配布物については、これまで継続していたバイリンガル内容だけでなく、海外の人が必要とする海外目線の情報も盛り込むなど、新たな試みを検討する必要があると感じている。また、ウェブサイトなど、観光客が来日するときに彼らの目にとまるような情報発信も充実させ、「また来たい」と思ってもらえるようなサービスの提供を積極的に進めたい。

取材件数 178件(和文媒体 174件／外国語媒体 4件)

■ 展覧会 計 112 件(和文 110 件／外国語 2 件)

1. 雲をつかむ:原美術館／原六郎コレクション
(2022年3月19日－2023年1月9日) 100件[和文98件／外国語2件]
2. 青空は、太陽の反対側にある:原美術館／原六郎コレクション
(2023年3月24日－2024年1月8日) 12件[和文12件]

■ 施設紹介、他 計 66 件(和文 64 件／外国語 2 件)

1. 原美術館 ARC 37 件[和文 35 件／外国語 2 件]
2. イベント、ワークショップ 16 件[和文 16 件]
3. カフェ ダール 1 件[和文 1 件]
4. ザ・ミュージアムショップ 1 件[和文 1 件]

5. ロケ 2件[和文 2件]
6. ARC その他 4件[和文 4件]
7. その他 5件[和文 5件]

〈掲載媒体〉（和文／外国語、順不同）

【新聞】上毛新聞、朝日新聞、夕刊マリオン(朝日新聞社)、毎日新聞、東京新聞、新美術新聞(美術年鑑社)、ちいきしんぶん(ライフケア群栄株式会社)、日本教育新聞、教育家庭新聞、中外日報

【テレビ】「ほっとぐんま 630」(NHK 前橋放送局)、「インフォチャンネル 700」(ジャパンケーブルキャスト)、「TVBS 新聞」(TVBS 新聞)

【ラジオ】MOTORING MUSIC (J-WAVE)

【美術・デザイン専門誌】美術手帖(美術出版社)、月刊ギャラリー(ギャラリーステーション)、月刊美術(サン・アート)、ONBEAT(株式会社音美衣社)

【建築・デザイン専門誌】Casa BRUTUS(マガジンハウス)

【その他・専門誌】若越習字(若越書道会)

【一般誌】アンドプレミアム(マガジンハウス)、和楽(小学館)、ノジュール(JTB パブリッシング)、Discover Japan(株式会社ディスカバー・ジャパン)

【女性誌】SPUR(集英社)、ゆうゆう(主婦の友社)、オズマガジントリップ(スターツ出版株式会社)

【男性誌】UOMO(集英社)

【情報誌】BRUTUS(マガジンハウス)、月刊 bilick(有限会社シンクリード)

【ガイドブック】群馬の博物館・美術館ガイドマップ(群馬県博物館連絡協議会)、るるぶ情報版(JTB パブリッシング)、まっふるマガジン(昭文社)、まっふるドライブ(昭文社)、じゃらん大人のちょっと贅沢な旅(株式会社リクルート)

【ムック・書籍】ぶらぶら美術・博物館プレミアムアートブック(株式会社 KADOKAWA)、ことりっぷマガジン(昭文社)、ときめきのミュージアムグッズ(玄光社)、moment(トヨタファイナンス株式会社)

【フリーペーパー】からふるマガジン(ネットヨタ群馬株式会社)

【スマホアプリ】チラシミュージアム(イープラス)、ミューぼん(株式会社アートビート)、週刊じゃらん(株式会社リクルート)

【ウェブサイト】美術手帖(美術出版社)、Internet Museum(丹青社)、TOKYO ART BEAT(株式会社アートビート)、JDN(JDN)、Walkerplus(KADOKAWA)、art scape(大日本印刷)、art commons(国立新美術館)、Art iT(アートイト)、美術展ナビ(読売新聞)、アートアジェンダ(FAITH)、個展なび(個展なび)、アートテラー・とにへの【ここにしかない美術館】、Numero TOKYO(扶桑社)、Premium Japan、ミヅマアートギャラリー、時の海ー東北、WHITESTONE(Wfitestone Gallery)、UOMO(集英社)、Fashion Press(Fashion Press)、CINRA、FIRST DRIVE、キタコレアート(博報堂ケトル)、公益社団法人日本大阪視覚芸術協会、レクサスニュース(レクサス)、旅色(ブランジスタメディア)、日本観光局 Visit Japan from Taiwan(株式会社ブレイン)、LIVE JAPAN、Art Card(Deutsche Bank)、NAVITIME(ナビタイムジャパン)、群馬生涯学習センター、こそだてまっぷ(学研プラス)、goo ニュース(NTT レゾナント)、dmenu ニュース(NTT DOCOMO)、伊香保つくし(伊香保温泉旅館協同組合)、日本旅行(株式会社日本旅行)、Dokka!おでかけ探検隊(Dokka エンタープライズ)、BIGLOBE 旅行(ビッグロブ)、ゆこゆこ、るるぶ&more(JTB パブリッシング)、JR おでかけネット(JR 西日本)、関越交通、じゃらん net(リクルート)、ぴあ、他

【その他】ルイスポールセン顧客向けメールマガジン、多摩美術大学芸術学科 R、中央ろうきん 2023 年カレンダー、メセナ群馬(公益社団法人企業メセナ群馬)、テレマップ(伊香保温泉旅館協同組合)、渋川市情報誌 Kirari しぶかわ(渋川市)、ぐんま広報(群馬県メディアプロモーション課)、群馬県定例記者会見用フリップ(群馬県地域創生部文化振興課)、群馬県渋川・伊香保温泉バリアフリーマップ(渋川市)

D. Hara Museum Web

www.haramuseum.or.jp

blog:www.art-it.asia/u/HaraMuseum

Twitter: @haramuseum_arc

Instagram: @haramuseumarc

令和 4 年度の動き

株式会社イーティックスデータファームのオンラインチケット販売システム「e-tix」を導入し、3 月 1 日より前売りオンラインチケットの販売を開始した。これにあわせて公式ウェブサイトに e-tix の購入ページのリンクバナーを付け、来館者の前売り購入を促すという新たな試みを行った。

<アクセスログ解析(<https://www.haramuseum.or.jp>)>

・アクセス数

*月平均訪問者数	0.3 万件	(昨年度 0.4 万件)
*月平均訪問件数	0.9 万件	(昨年度 1.8 万件)
*月平均閲覧ページ数	0.9 万ページ	(昨年度 1 万ページ)
*月別最多訪問者数	0.4 万件	(2022 年 5 月 雲をつかむ展第1期)

E. 海外交流

【1】 招聘 なし

【2】 派遣 なし

F. メンバーシップ

【1】 メンバーシップの動き

令和 4 年度は、コロナ禍による行動制限が徐々に緩和の方向に向かったことを受け、安心安全を心掛けつつ、メンバーシップイベントを多数開催することができた。4月には、統合後初の新宿発着のメンバーシップバスツアーを開催。Art in Town では東京オペラシティアートギャラリー、国立新美術館、森美術館等での展覧会鑑賞と各担当キュレーターから貴重な話を伺うことができた他、伊豆高原の黒田泰蔵氏のアトリエや、当財団役員の大林剛郎氏に多大なご協力をいただき、氏のプライベートスペースである「游庵」を訪問するなど、個人では訪れることの難しい場所へメンバーの皆様をご案内し、特別なアート体験をしていただくことができた。ARC ではメンバー向けに開架式収蔵庫ツアーを開催し、好評を博した。新規入会の約6割が群馬県内在住、継続入会の約6割が都内在住であるが、どのイベントも、群馬県内、県外の両メンバーの参加がみられた。引き続き、群馬県内の方、東京・首都圏在住の方、どちらにも魅力あるプログラムを提供し、会員数増員を目指してゆきたい。

会費・会員数推移

令和2年度から令和3年度にかけては、コロナ禍の影響により無料で有効期限を1年延長した会員も多数いたため、会員数はほぼ横ばいであったが、この統合前からの会員の継続に苦戦したこともあり、会員数が減少する結果となった。

令和4年度末における会員総数は106件。新規加入35件、継続加入71件。

(単位:円、消費税込)

令和 2 年度		令和 3 年度		令和 4 年度	
会員数	会費金額	会員数	会費金額	会員数	会費金額
192	8,159,346	201	5,320,000	106	5,180,000

【2】 カテゴリー別会員数

フレンズ会員 84 名、個人賛助会員 13 名、法人賛助会員 9 社

II. 庶務事項

A. 役員に関する事項

令和5年3月31日現在

(50音順)

役員	氏名	就任年月日	担当職務	職業
評議員	麻生和子	R1.6.19		一般財団法人アジアン・カルチュラル・カウンシル日本財団 代表理事
評議員	大林剛郎	H23.11.1		株式会社大林組 代表取締役会長
評議員	佐藤陽一郎	R4.7.29		太陽グラントソントン税理士法人 代表社員 税理士
評議員	徳川義崇	H27.6.25		公益財団法人徳川黎明会 会長
評議員	原直道	H23.11.1		日本土地山林株式会社 代表取締役社長
評議員	丸山剛郎	H27.6.25		大阪大学名誉教授、特定非営利活動法人日本咬合学会 理事長、歯学博士

役員	氏名	就任年月日	担当職務	職業
理事長	原俊夫	H23.11.1	常勤	日本土地山林株式会社 取締役会長
常務理事	原洋子	R1.6.19	常勤	株式会社アーテック 取締役
理事	國生肇	H23.6.30		國生肇法律事務所 弁護士
理事	坂本正	H23.6.30		学校法人高輪学園 理事長
理事	平野信行	R4.7.29		株式会社三菱UFJ銀行 特別顧問
理事	安田信	H23.6.30		株式会社安田信事務所 代表取締役社長

役員	氏名	就任年月日	担当職務	職業
監事	千葉雄二	H27.6.25		千葉雄二税理士事務所 税理士
監事	野嶋慎一郎	H23.6.30		野嶋慎一郎法律事務所 弁護士

B. 職員に関する事項

令和5年3月31日現在

所 属	主な役職者、部署別人数	担 当 業 務
原美術館ARC	館長 青野和子	美術館統括 主任学芸員 教育プログラム事項 作品管理事項
	学芸部 2名	学芸事項
	管理部 1名	管理業務
理事長室	1名	国際プログラム事項 メンバーシップ事項
事務局	事務局長 加藤隆一	法人事務
合 計	6名	

(備 考)

- 1.上記の他、アルバイトが常勤している。

C. 役員会事項

1. 評議員会

【第1回開催】令和4年6月20日

〔報告事項〕

- (1) 令和3年度（令和3年4月1日から令和4年3月31日まで）事業内容報告の件

〔決議事項〕

- (1) 令和3年度（令和3年4月1日から令和4年3月31日まで）事業内容報告及び計算書類審議の件

〔結果〕報告事項について議長は、令和3年度の事業経過につき、理事長他担当学芸員等に説明を求め、別添資料に基づく詳細な説明がなされた。

第1号議案について議長は、令和3年度の計算書類承認の件を上程し、事務局長に計算書類の内容について説明を求め、事務局長により別添資料に基づき詳細な説明がなされた。合わせて監事より令和3年度決算について、計算関係書類が法人の損益及び財産の状況を適正に示していること、また、令和3年度事業報告書及びその附属明細書について、法令及び定款に従い法人の状況について正しく示していることを認めた旨の監査報告がなされた。そこでこれを議場に諮ったところ、出席評議員全員一致をもって原案通り承認可決した。

【第2回開催】令和4年7月29日（評議員会の決議があったものとみなされた日）

〔決議事項〕

- (1) 理事1名選任の件
理事候補者 平野 信行氏
- (2) 評議員1名選任の件
評議員候補者 佐藤 陽一郎氏

〔結果〕令和4年7月21日、代表理事 原俊夫が評議員に対して上記決議事項を記載した書面を発し、当該決議事項につき、令和4年7月29日に議決権を有する全評議員より書面により同意の意思表示を得たので、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第194条第1項の規定により当該提案を可決する旨の評議員会の議決があったものとみなされた。

2. 理事会

【第1回開催】令和4年6月3日（理事会の決議があったものとみなされた日）

〔決議事項〕

- (1) 令和3年度（令和3年4月1日から令和4年3月31日まで）事業報告内容を報

告し、計算書類等承認決議の件

(2) 定時評議員会招集決議の件

〔結果〕令和4年5月27日、理事長原俊夫が理事及び監事全員に対して上記理事会の決議の目的である事項について提案書を発し、当該議案につき、令和4年6月3日に理事の全員から書面により同意の意思表示を得たので、当該提案を可決する旨の理事会の決議があったものとみなされた。

【第2回開催】令和4年7月20日（理事会の決議があったものとみなされた日）

〔決議事項〕

(1) 理事1名選任の件

平野信行氏を理事候補者とする議案を各評議員に提案する。

(2) 評議員1名選任の件

佐藤陽一郎氏を評議員候補者とする議案を各評議員に提案する。

〔結果〕令和4年7月11日、理事長原俊夫が理事及び監事全員に対して上記理事会の決議の目的である事項について提案書を発し、当該議案つき、令和4年7月20日に理事の全員から書面により同意の意思表示を得たので、当該提案を可決する旨の理事会の決議があったものとみなされた。

【第3回開催】令和5年3月14日

〔決議事項〕

(1) 令和5年度（令和5年4月1日より令和6年3月31日）事業計画及び収支算承認の件

〔報告事項〕

(1) 令和4年度（令和4年4月1日より令和5年2月28日現在）事業執行状況報告の件

(2) その他

原美術館 ARC の入館料の改定とメンバーシッププログラムの内容の改定について

〔結果〕第1号議案について、議長は、令和5年度の事業計画及び収支予算について別添資料の通りとしたい旨とその内容を説明し、これを出席者一同に諮ったところ、全員一致をもって原案通り可決承認した。

報告事項について、議長は、令和4年4月1日移行の業務執行の状況説明のため、令和5年2月28日現在の別添資料に基づき、事業の推移と令和5年3月期の収支決算の予想について説明し報告した。

その他の報告事項として議長は、令和5年3月24日からの原美術館 ARC の入館料の改定と4月1日からのメンバーシッププログラムの内容の改定について、担当者により説明し報告させた。

D. 関連組織兼任事項

理事長原俊夫が役員を兼任する外部関連団体、役職

令和5年3月31日現在

1. ニューヨーク近代美術館国際評議会 名誉会員
2. ホノルル ミュージアム オブ アート 名誉評議員
3. 公益財団法人徳川黎明会 評議員
4. 公益財団法人大林財団 名誉評議員
5. 学校法人高輪学園 評議員

E. 庶務

1. 博物館における青少年に対する学習機会の充実に関する基準、望ましい基準
群馬県に対し「青少年を対象にした取り組み等に関する実績報告」を令和4年6月24日に届出した。

Ⅲ. 委託付帯事業事項

原美術館 ARC において株式会社アーテックが当財団より委託され営業している The Museum Shop 及びカフェ ダールの運営状況は次の通りである。

【1】物販(The Museum Shop) 年間販売額 1,214 万円(税別)

年間利用客数 4,603 名 対総入館者比 19.2%

カタログ販売数 132 点 ポスター販売数 19 点

主な販売商品

SHOP@CAFE 企画 :小瀬村真美(写真作品)

オリジナルポストカード、オリジナルグッズ、草間彌生グッズ、奈良美智グッズ、鈴木康広グッズ、倉俣史郎ポスター、内倉ひとみマルチプル、コムデギャルソン香水、LOQI エコバッグ、MiW ハンカチ、doodlin'アパレル、ぼれぼれ動物オブジェ、KISSO アクセサリーなど、約 1,000 品目。

【2】飲食(カフェ ダール) 年間販売額 722 万円(税別)

年間利用客数 7,857 名 対総入館者比 32.8%

IV. 寄付金等に関する事項

(令和4年4月1日から令和5年3月31日まで)

(単位：円)

寄付の目的	寄付者	領収金額	備考
1. 寄付金	個人	40,600,000	6件
	法人	300,000	1件
	寄付金計	40,900,000	
2. 助成金	一般財団法人MRAハウス	1,000,000	次世代リーダーのための 感性育成プログラム (バスツアー3回)
	助成金計	1,000,000	
	合計	41,900,000	

事業報告の附属明細書

事業報告の内容を補足する重要な事項はありません。